

「患者の不安をくみ取り、寄り添える医師になりたい」と岡山山医学部5年渡部寛史さん(24)は言う。そう強く思わせるのは、東日本大震災の被災地の活動経験だ。

2014年4～11月、福島県相馬市の病院で、東京電力福島第1原発事故を踏まえた住民対象の内部被ばく検査を補助した。担当したのは週3、4日、問診票のチェックや検査装置への誘導、検査結果の記録だ。

多い日は約40人の住民と接した。内部被ばくが確認されたのはごく限られた人で、それも微量だったが、食べ物など放射性物質への不安を抱えていると感じたという。

被災地での経験 医療に

あかり



「人はさまざまな背景を持っている。じっくり耳を傾けることが患者の思いを深く理解し、よりふさわしい治療法を見いだすための力になるはず」。目指すべき医師像を思い浮かべた。

被災地との関わりは12年夏が始まり。宮城県南三陸町を仲間と訪れ、がれき撤去などのボランティア活動に約1週間取り組みんだ。がれきの残る街並みに「目の前の光景を自分の中で消化できなかつた」。岡山へ戻っても被災地のことが頭から離れない。支援のためにと休学を決意、岡山大の紹介で実現したのが内部被ばくの検査補助だった。

呉市出身。高校時代、海外研修で訪れたフィリピンの孤児院やスラム街で、子どもたちを治療する医師を目の当たりにし、「苦しむ人を救える技術を身に付けたい」と医師を志した。

震災は11日で発生から4年3カ月。渡部さんは「災害はどこでも起こり得る。万一の時にどう行動するか日ごろから考えるべきだ」と話す。被災地の光景、住民の思いを、岡山の高校生らに語る活動も考えている。

(岸研一)